



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	小特集序文：北海道大学ALP・科学技術広報研究会合同シンポジウム 研究成果をなぜ発表しどのように伝えるのか～科学と社会のより良い関係をめざす～
Author(s)	早岡, 英介
Citation	科学技術コミュニケーション, 18, 59-60
Issue Date	2015-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/60393
Type	other
File Information	Costep18_5.pdf



小 特 集

北海道大学ALP・科学技術広報研究会合同シンポジウム 研究成果をなぜ発表しどのように伝えるのか ～科学と社会のより良い関係をめざす～

2015年4月28日、北海道大学物質科学フロンティアを開拓するAmbitiousリーダー育成プログラム（ALP）と科学技術広報研究会（JACST）の共同主催による合同シンポジウム「研究成果をなぜ発表しどのように伝えるのか～科学と社会のより良い関係をめざす～」が北大学術交流会館にて開催された（北大CoSTEP、日本科学技術ジャーナリスト会議、日本サイエンスコミュニケーション協会共催）。この小特集では、登壇者による講演およびディスカッションを収録した。

学内外から140名余が参加し、STAP細胞論文問題を端緒に、研究成果を発表する際に抱える研究者や広報担当者の悩みや葛藤、そしてメディアの役割や研究倫理について、9名の登壇者による事例紹介と活発な議論が行われた。

新田孝彦北海道大学理事・副学長からは「なぜ科学技術の倫理なのか」と題して、科学と社会のより良い関係についてハーバーマスやポパーといった哲学者の議論をもとにした基調講演があった。それを受けて、理化学研究所が設置した「研究不正再発防止のための改革委員会」委員をつとめた中村征樹大阪大学全学教育推進機構准教授が「研究成果の発表と研究倫理」と題した事例紹介を行った。STAP騒動は、科学技術コミュニケーションが時に過剰な期待を煽る方向へ手を貸す危険性があることを示唆している。

続いて論点提示として南波直樹氏（理化学研究所多細胞システム形成研究推進室）が「STAP問題から何を学ぶか」と題して、STAP騒動において広報に関わった当事者としての経験を語った。そして永山悦子氏（毎日新聞科学環境部デスク）は「研究成果を報じる「喜び」と「苦しみ」」と題して、報道する現場の希望と苦悩について話した。それぞれ当時の状況を振り返り、研究機関の広報やメディアにとってどのような教訓が得られたのか、舞台裏でしか知り得ない貴重な経験をもとに話してくれた。

また生命科学の研究現場が抱える問題について積極的な提言を続けてきた榎木英介近畿大学医学部講師には、STAP騒動の際メディアからの取材が殺到した。今回、「科学の事件は社会からどう見られているか」と題して、取材された体験をもとに「中間的な専門家」の必要性を話してくれた。岩崎秀雄早稲田大学理工学術院教授は「一研究者／表現者の立場から」と題して、「科学の価値を表現する方法は論文だけではないのでは」という、科学と表現のあり方に対する本質的な問いかけを行った。

こうした論点提示を受けて、総合パネルでは小出重幸氏（日本科学技術ジャーナリスト会議会長／元・読売新聞科学部長）がファシリテーターをつとめ、岡田小枝子氏（科学技術広報研究会会長／高エネルギー加速器研究機構広報室長）、前述の南波氏、永山氏、榎木氏、岩崎氏の5名のパネリストが活発な議論を繰り広げた。最後に内村直之氏（科学ジャーナリスト／北大CoSTEP客員教授）が、「議論で見た研究成果発表の「なぜ」「どのように」」と題してこのシンポジウムを締めくくった。

理化学研究所を中心に起きた研究不正をめぐる問題から、研究者は、研究機関広報は、メディアは、そして科学技術コミュニケーターはどのような限界を感じ、それぞれ何を学んだのか。また悩みと苦しみの果てに、いかなる展望が見えてきたのだろうか。それぞれの立場から見えた景色はきっと微妙に異なっているはずだが、重なり合うその先に希望の光が見えると信じたい。

本特集が、科学と社会の信頼関係を再構築するための一助となれば幸いである。

文責：早岡英介（科学技術コミュニケーション編集委員長）